

番外編

# エバーグリーン

Miu Otsuki 大槻ミウ

ダリアコミックス「いじわるな人」大好評発売中!!

うわー  
なんなのコレ  
超ーザンシヨー

昌直<sup>まろなぢ</sup>も  
アイスかえば  
よかったのに

あつー



ダリア文庫

# 「オオカミは恋を語る」番外編

著：高月まつり

ウェブ特集と特別雑誌の仕事がようやく終わった。

売れっ子占術師の錬義英司は、それぞれの担当編集から送信された「問題ありません。ありがとうございます」メールを読み終えて、安堵のため息をつく。

「さて」  
英司はゆっくりと椅子から立ち上がり、ぐっと伸びをした。

仕事忙しいのはありがたいが、恋人との甘い時間まで削れていくのは切ない。英司はデスク脇の棚に置いておいた携帯電話の電源を入れると、すぐに恋人へメールを打った。  
『仕事が終わった。今夜は君の好きなカレーを作ろうと思う』

もしかや仕事が長引くかも……と、今週いっぱい個別の占い予約を受けていない。  
ウキウキと浮かれる金曜日の午後。

仕事の休憩時間にメールを読んだら、きつと可愛い恋人は、仕事が終わったら即座に我

が家（と言っても古いマンションだが）へ自転車で駆けつけてくれるだろう。

そしてドアを開けるとカレーの匂いに歓迎されるのだ。

同棲して間もないのに、仕事のせいで一週間も寂しい思いをさせた恋人をねぎらってやりたいと、英司は両手の拳に力を込める。

料理にはあまり興味がなかったが、やってみると案外楽しいということに気づいた英司は、本来の凝り性も手伝って、今ではかなりの腕前になっている。仕事に余裕があるときは、恋人の元に弁当を届けていた。

「……冷凍庫に骨付きの鶏腿肉があるから、それを解凍して……」

これからの手順を口に出している途中、英司の携帯電話がメール着信音を響かせた。

『お疲れ様でしたっ！ 仕事が終わったらすぐに帰るっ！』

元気のいい返信メールに、端正な英司の表情が緩む。

『待っているよ、修生』  
一瞬、顔文字も足そうと思ったが、それは

ちよつと子どもっぽいかたと踏みとどまる。  
恋人の修生と同じ二十代であっても、彼は

二十歳で自分は二十九。女性たち風に言えば

アラサーだ。この年で可愛い顔文字は我ながら気持ちが悪いと、英司は苦笑を浮かべて送信した。

「……いつになったら、英司の呪いは解けるのかな？」

銀工房での仕事を終えて全速力で英司の元に駆けつけた井村修生は、食事の前に英司に抱きついて呟く。

「まあ……ゆっくり待たせてもらうよ。今も君のお陰で、一族の呪いは解けているのだからね」

よしよしと、英司は修生を抱き締め返して優しく背を叩いた。

仕事上のトラブルから、修生の先祖は英司のご先祖に滅茶苦茶な呪いをかけた。しかもその呪いは子々孫々まで続いている。

その呪いによって、午後十時から午前四時までの六時間は狼の姿になってしまう呪いだ。

英司が、自分の先祖に呪いをかけた一族の子孫である修生を見つめるまでは絶望的だったが、今では少しずつ呪いは解けていった。